

幼児表象画に学ぶ

演習講義「最小表現『点』」の導入と指導法

塙 和道 竹永 亜矢

Lessons from Young Children's Representational Pictures-
Practical unit "Introduction of the 'Point' as the Smallest
Expression Element and Instruction Method"

Kazumichi HANAWA

Aya TAKENAGA

Abstract:

The practical class "Arts and Crafts Expression (instruction method)" sets two tasks relating to a point which is the smallest element for expression.

Task 1 Express an abstract theme using points within a limited area.

Draw lines between the points to identify the shape of an animal.

Task 2 Use the points of the smallest element to create a cubic effect and spatiality.

This paper discusses the importance of learning characteristics of first-time representational pictures by young children in a respectful manner.

Keywords: point, first-time picture, cubic effect, spatiality, young children's representational picture

要 約

演習授業『造形表現（指導法）』では「最小表現『点』」における二つの課題がある。

設題① 表現のため『許される面積の点』を用いて抽象的テーマを描く。

点を線で結んで動物を見いだす。

設題② 最小表現『点』を用いて立体感と空間性を表出する。

本稿では幼児表象画「初めての絵」の特性に尊厳をもって学ぶことを呈する。

キーワード：点・初めての絵・立体感・空間性・幼児表象画

I. はじめに

この演習講義は各設題を解説と制作で各 90 分を單元ごとに配した。当講義目的は幼児の描画表現、人生で『初めての絵』を理解するために、幼児の描画表現を注視し、これに、学ぶため、援助者自身の感性を高めることにある。

塙は造形表現における幼児表象画『点』表現は運動能力(描画活動)と認知能力(感受性)の交流から生まれる。作者自身が必要と認める最小面積の痕跡であると定義する。

脳には神経細胞(ニューロン)が存在し、ネットワークを構成している。ニューロン間の情報伝達は軸索の末端シナプスと次のシナプスにシナプス間隙があり伝達物質が放出され次のニューロンに引き継がれる。刺激が記憶として構築されるには、再生、想起を繰り返し反復学習することで認識を繰り返す必要があると言われている。近藤寿人編『芸術と脳』—絵画と文学、時間と空間の脳科学—(小倉明彦—3章時空間記憶と夢の仮設—)

2014 大阪大学出版会

電気信号の交流のように感性と運動が触れるか触れないかの空間を保ち、神経の交流を絶え間なく感じうるとき、指先に最小面積の点交流の痕跡として無数に生じていること放電していることを気付く。この時の感受している感覚が『点』が生まれている瞬間と同じと考えてほしい。和紙と長く持った筆先がわずかな空間を保ちながら紙面をはい回る様である。線がついたり離れたり、墨跡は細い鉄線のような鋭さも、早さも、美しさもない、おびえたような、不安定で、まばらで弱弱しい。点の連続が生まれているのである。

禅宗の鍛錬の一つに座禅がある。体幹を正しチャクラを意識して座し、見るでもなく眠るでもない半眼、印相を構える。瞑想の境地を体感する鍛錬である。このとき、印相は指先を触れるか触れないか、神経が常にうごめいている、交流している空間を保ち、常に意識を通じていなければならない。天をさすときは空気と、大地をさすときは大地と、皮膚と皮膚、感性の交流、すなわち静かで、微妙な放電を感じている運動が大切なのである。

筆先が描画紙に触れるか触れないかで、たどたどしく、形態を追って描かれる墨線は紙をびりびりとやぶいたと同じに鋭い美しさはない。しかしながら、やさしく、どことなく親しみやすい暖かさを感じさせる。まさしく何故か味わいのある心に響く筆跡を生む。

ハサミですっきりと裁断した美しさ、鋭さより、びりびりと指先で破いた、いろがみの裂跡は視覚的に私たちの感性をゆりうごかすエネルギーを現わすエッセンスになっているのである。フェルトペンと画用紙が触れるか触れないかの最小面積の痕跡を得ることが大切なのである。

塙は、そこに描こうとする運動(身体表現活動)と感受性(知覚認知能力)の微細な空間でおこる感性的電流、電気信号の交流痕跡(放電)を造形表現では『点』と認識し、作者が俯瞰(客観視)した、自己表現に必要と認めた最小面積の大きさまでを(筆跡)描画における『点』(物体としての形態を持たない。)と定義しているのである。

II. カンディンスキーの定義

ヴァシリー・カンディンスキー(Wassily Kandinsky 1922)は、「芸術は人間の手から

開花してゆく。……ここにこそ、創造的造形活動の源泉がある」(Peter Anselm Riedl, 1983 金田・森訳, 1996, p 104) バウハウスの専門家の養成が主題ではなく、創造的活動の条件として手工性を把握する普遍的造形理論へ導くことを目的とする、造形芸術と科学と技術、経済産業を総合的理念とする教育活動に招聘され、1926年雑誌『バウハウス』の第1号に「絵画における理論的授業の価値」という論文を書き、同年『バウハウス叢書』第9巻に『点、線、面』という論考をのこしている。(Peter Anselm Riedl, 1983 金田・森訳, 1996, pp103-136) また、カンディンスキーは1959発行の著書『点・線・面』—抽象芸術の基礎—発行:(株)美術出版社 西田秀穂訳、21頁～56頁で点を論じ、同書32頁に『点』を下記の様に定義している。

『点は、基礎平面に悔い込んで、永遠に自己を主張しつづける。このように点は、内面的には、無造作に、そしてしっかりと、しかも速やかに成立するところの、もっとも簡潔な、しかも鞏固な主張、とみることができる。

それゆえ、外面的ならびに内面的な意味において、点は、絵画、殊に《版画》の最初の要素である。

要素なる概念を理解するには——外的概念として理解するばあい、それに内的概念として理解するばあいの——二種の仕方がある。

そして事実、絵画的作品の内容を具象化するのは、外面的な形態ではなく、外面的形態のうちに働いている種々の力=緊張である。

これに対して本来の要素とは、この形態のうちに生き生きと働いている緊張の事を云うのである』同33頁

Ⅲ. 初めての絵

人生「初めての絵」描画とは点で表現されると幼児表象画の発達では生後11カ月頃から始まるとされている。

下記の写真は塙の指導で、孫に試みた初めての描画体験記録である。

		<p>環境: この作品はサークル内に模造紙を敷き詰め描画材料(木炭)を与えて行った。</p> <p>1歳2ヶ月</p> <p>1回目の体験日(左写真)から4日目、同様に行った表象画(スクリブル)である。</p>
		<p>環境: この日伝い歩きが1歩できた。四つ切り画用紙と描画材(クレヨン)を与え机で描かせると点と投げやりな線表現を描いた。</p> <p>11カ月</p> <p>3歳離れた兄がいる。</p>

先史時代、洞窟壁画などの遺構から推測できる『初めての絵』は棒を振り回し大地に打ち付ける、消し炭のついた棒を壁に投げつけるとき、何らかの痕跡が生じる。手を置いて泥や炭を含んで吹きかけると形が投影される。このようなことに関心を持ち、同じ行為を繰り返し反復、探索を行い、点や線が生まれることを知覚する。現代の幼児が砂場や曇りガラスに指で落書きをする。これらも初期の描画活動といえるのである。

先史の子供たちも描画の始まりを、現代のように紙や鉛筆に限らない石や木切れ、泥などの遊び体験から獲得していたのである。

ローダ・ケロググ (Rhoda Kellogg 1969) は幼児絵画を環境が違う世界各地から 100 万枚の絵を集め分析により、どこの国の子供も描画表現の発達過程に差異はなく、scribbles (スクリブル)、diagrams (ダイアグラム/単体図)、combines (コンバイン/結合図)、aggregate (アグリゲイト/集合図)、そして picture-stage (ピクチャーステージ/絵画期) に達すると論じている。(Rhoda Kellogg, 1998 深田 p 序文 ii)

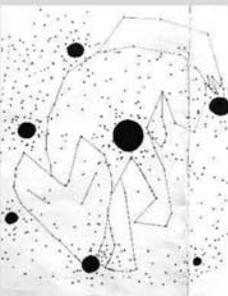
IV. 演習講義『造形表現(指導法)』『最小表現『点』の設題①、設題②

設題① 表現のため『許される面積の点』を用いて抽象的テーマを描く。

点を線で結んで動物を見いだす。

1. 導入

- 1) 点の定義、描画活動(運動)と感受性(感性)の交流を、印相の指先で触れるか触れないかの微細な空間の感性の交流を体感させ画用紙の紙面とフェルトペンの最小接点の面積を求めさせる。
- 2) この経験をもとに目を閉じて、何らかの抽象的イメージを思いながら 200 回の点を打ち描かせる。
- 3) 目を開けて先ほどの抽象的イメージを紙面左上の番号名前横に表題として表記させる。さらによりイメージを鮮明に表現するため、点を 200 回追加してデッサンを進めさせる。造形表現は作者の意図する自由な世界である。幼児の表象画は誰も犯すことができない世界で唯一の大切な表現作品であり、私たちが理解しようと考えてもできない幼児だけの自由な探索表現、成長の足跡を残すものである、と説明する。
- 4) この作品をどれくらいの距離で俯瞰して表現するかをそれぞれ作者が許す大きさを自己の責任で面積を拡大し、より抽象的イメージを具体化する創作、創造デッサンの楽しみを体験させて演習を終える。

	<p>テーマ：家族</p> <p>お父さんがいて お母さんや子供が集まっている。 そしてまたその一つ一つが分かれて 他の家族を作ってゆく。</p> <p>家族には真ん中があって。 大きかったり小さかったり さまざまなまんながある。</p> <p>見つけた動物：キツネ</p>
---	---

5) 終えた作品の『点』を新たに夜空の星に見立て、星座として動物を見つけさせる。

2. 演習設題① アンケート調査・考察

(1) アンケート調査結果報告

実施日 2017年9月25日

近畿大学九州短期大学 図画工作室		対象：通学生1年生2クラス56人					
A. 幼児表象画の人生初めての絵『点』が理解できたと感じるか。(幼児画の理解)							
1 大いに感じた	26%	2 感じることができた	60%	3 少し感じた	14%		
B. イメージしたように創作表現することができたか(作品について)							
1 大いにできた	25%	2 普通にできた	42%	3 少しできた	33%		
C. あなたは1歳児にはじめて描画活動を援助する時どのようにしますか							
1 今日の体験を活かして指導する					49%		
2 好きなように放っておいて描かせる					33%		
3 木炭などの啜えても害にならないもので環境を整え活動させる					18%		
D. 楽しく演習講義が受けられましたか							
1 大いに楽しかった	20%	2 楽しかった	57%	3 少し楽しかった	4%	4 辛かった	4%
E. 自分の作品についてイメージを含めて感想を書いてください							
<ul style="list-style-type: none"> ・初めて『点』だけで絵を描きイメージを表現できたことに驚いた。楽しかった ・絵が上手になったように思えた。想像力が豊かになり、気持ちが楽になった。 ・思いもよらず、無意識から絵が生まれ、点の中から動物が見つかりおもしろかった。 ・星座のように動物を探すのは難しかったが、見付きり驚いた。 ・目をつむって『点』を打つのはむつかしかった。 ・『点』がブツブツで気分が悪くなった。 ・自由にかけたので楽しかった。 ・描くことがとてもむつかしかった。 							

(2) 考察

問Aから幼児の初めての絵『点』に学ぼうとする援助者としての姿勢がうかがわれる。

問B・Dから演習課題の想像から創造への自己作品の制作について意欲的に取り組めた学生が多くいる。

問C-1を選んだものは教諭として現場で教える事を優先しがちで、幼児を援助し学ぼうとする姿勢に欠けている。

問C-2を選んだものは幼児の描画活動を自由奔放にさせることで放任、軽視に陥る傾向にある。

問C-3を選んだものは演習講義により初めての絵に学び、適切な描画活動を援助する姿勢を心掛けていとみられる。

問Eの記述事項では、1名がつかかった作業に触れている。個別に絵画表現の楽しさを体験させる機会を繰り返し、演習体験を増やすことが大切と考える。

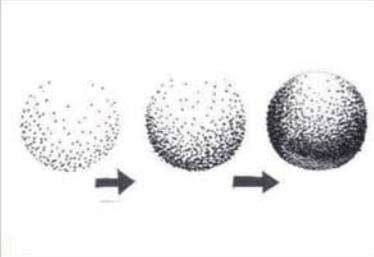
他はおおむね自らの描画能力に開眼するような記述が多かった。目を閉じて描く体験イメージを点で描く体験（抽象的な自由表現）、出来た作品から星座を見るように動物を発見する驚きの3つのサプライズを用意して、幼児表象画の初めての絵『点』を印象付けている。その結果、誰にでも自由に描く表現が出来、世界に一つのオンリーワン、誰も同じ絵が描けない私だけの大切な作品制作。誰もが好感を抱く体験を用意したことで、みんなが同じ経験をする、描く表現の平等と自由を体験し学んだと考えられる。

この課題を終えて表現された『点』には視覚上の性格から次のような特性が認められる。

- ・最小表現の面積を持つことで、表現における想像の起点となる。（視覚的想起）
- ・大小、集合、拡散、連打などによる運動感・遠近感・立体感などを誘引する。（想像）
- ・ピクセルや網掛け、スパッタリングなど点の粗密集積による表現は濃淡、色調の変化から立体的画像を創造する。（拡大すると一色の『点』でしかない）

設題② 最小表現『点』を用いて立体感と空間性を表出する。

条件： 与えられた八つ切り画用紙に『点』を用いて、鶏卵一個と4cm～6cmの球体四個を構成しなさい。光源を任意に設定し、陰を表現しよう。

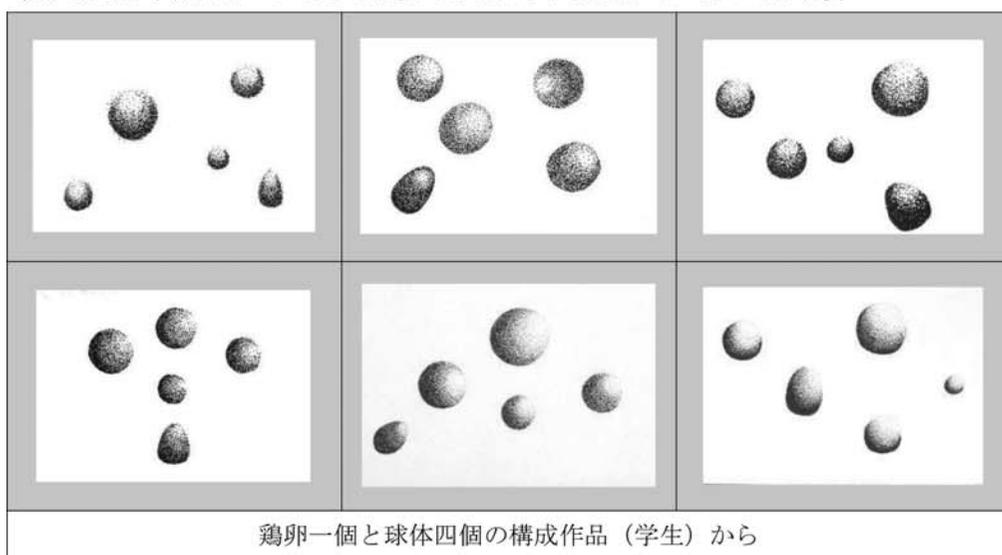
		
<p>球体の陰影</p>	<p>鶏卵の陰影</p>	<p>形はめ玩具 穴は3.5cm～9cm</p>
		
<p>浮いた卵の陰影</p>	<p>『点』表現の進め方</p>	<p>光源と位置関係の陰</p>

1. 解説

2歳児頃までに握れる立体は、およそ4cm～6cmで鶏卵の縦横の径に等しい大きさである。点は最小面積の表現であるため連ねて線にしないよう、表現はランダムに点を打つと陰の特徴は描きやすくなる。卵形と円形が陰によって平面から立体に表現されることにより、物体は握れるように表現され、背景の空間性はより高く現れるものである。

物体にあたる光の観察が陰影の基礎表現すべてに生かされるものである。

また、幼児表象画は、はじめての絵からスクリブル表現に、ハイハイで腕や肩の力が強くなると螺旋を描くことが多くなり、続いて、線が結ばれる単体円に名づける言葉遊びで援助者ともコミュニケーションごっこを始める。この頃の名づけはその時々でわがままに応答する。パパと言われて応答するとワンワンやニャンニャンなどに、その都度かわる特徴があるが単体円をモノとして表現できるように発達しているのである。



2. 演習課題② アンケート調査・考察

(1) アンケート調査結果報告

実施日 2017年10月2日

近畿大学九州短期大学 図画工作室		対象：通学生1年生2クラス56人			
演習課題②：幼児が握れる玩具（鶏卵の大きさ）と立体感と陰影					
下記のA～Eの問いに答えてください。（文頭の数字に○をつける）					
A. 幼児表象画の単体期（アグリゲート）に学んだ課題ですが理解できましたか。（幼児画の理解）					
1		2		3	
大いに理解できた	34%	理解できた	55%	少し理解できた	11%
B. イメージしたように立体感を表現することができましたか。（作品について）					
1		2		3	
大いにできた	21%	普通にできた	42%	少しできた	37%

C. 演習課題は幼児表象画の初期に関連した問題でした。単体期の幼児に援助する時あなたはどのようにしますか。(指導について)							
1 今日の体験を活かして指導する。							50%
2 好きなように描かせる。							33%
3 成長に配慮して、安全な環境を整え描画活動させる。							15%
D. 楽しく演習講義が受けられましたか							
1		2		3		4	
大いに楽しかった	30%	楽しかった	44%	少し楽しかった	20%	辛かった	6%
E. 単体期の幼児が握れる玩具の直径の大きさは。							
1		2		3			
7 cm～10 cm	6%	6 cm～4 cm	92%	3 cm～1 cm	2%		
F. 自分の作品について構成とイメージの感想を書いてください							
<ul style="list-style-type: none"> ・ 思いどおりに描けなかった。・ とても難しかったが楽しかった ・ 光源を意識して描くことができた。・ 光と陰を表現できた。 ・ 点ばかりで気持ち悪くなった。手がかかれた。難しかった・ 大変だった。 ・ 結構立体的に描けて楽しかった。・ うまくできなかった。・ バランスが悪い ・ 卵や球体が描けることがわかり、素晴らしかった。段々楽しくなった。 ・ 簡単そうで難しかった・ 修正がしやすかった・ イメージが膨らんだ。 							

(2) 考察

A の問いは幼児表象画の特徴、単体図（ダイアグラム）は、線が結ばれる円を表現し、知りうる語彙で、円に名づけて援助者とコミュニケーションをとりだす描画発達が理解しやすい成長の時期であることを問うている。

今回の演習課題における解説で幼児表象画の特徴をどのように理解したかの程度を自己採点、確認してもらい問としている。

問いの結果は、大半の（9割）の学生が理解したと答えている。

演習設題①と②の解説で、初めての絵『点』から偶然の描線、手首の弧線、肘の弧線、肩が使える螺旋スクリブル、始点終点の意思を持った線描き、クロス、そして円を結ぶ単体図（ダイアグラム）、単体が結合するコンバイン、3つ以上の単体で構成される集合図（アグリゲのト）、円に手足を現す線が描かれる（頭足人間）へ発達する描画の特徴を2回黒板に描き、解説したこと、関連した点の課題、玩具や鶏卵を用意したことによる実体験の認識が働いての効果といえる。

B 自身の作品で影と立体感の基礎表現が楽しく再表現出来たかを問い、現在まで義務教育段階で立体表現基礎学習、光と陰の基礎的な説明が充分理解できているかを各自の作品鑑賞で評価させた問いである。

この問いは自己作品に対して、自信を持ってない学生が3割と自信のある学生の2割を大きく上回っている。初めての点描による『光と陰』の表現が失敗を克服しやすい描法であること、身近な鶏卵と球体の繰り返しによる画面構成なので、我慢強く繰り返し、立体の現れを体現する、発見の喜びを自然と理解し、楽しむことができれば、表現作品に自信が持てる回答がえられる。『点』表現が鶏卵と4cm～6cmの球体4個だけと描く面積は小さいのだが、飽きずに表現を楽しみ集中できるかどうかは自己採点に影響すること、過去の描画基礎学習の経験における学びの深度、身近でわかりやすい『光と陰』の基礎観察体験の有無がその自信の評価に影響する結果となっている。

C. 演習課題は幼児表象画の初期に関連した問題でした。単体期の幼児に援助する時あなたはどのようにしますか。(指導について)

この問いは、演習課題のいかんにかかわらず、幼児教育に携わる者、親、近親者の、基本姿勢を問い、援助と寄り添い、環境保全を心得としているかを検証している。

1の回答者は援助者本位で指導教育を幼児に押し付けることになるのではないかと危惧する。学年が1年生であることから、実習や今後の学習経験で3の回答者が多くなることが予想される。

この講義は学生の基礎知識を向上させる演習であるのに対して、結果を実習演習と勘違いして授業内容を園児向けの課題と間違い、安易に依存してコピーしようとする期待値の高さと受け止めることも、教授者としては客観視する面を考慮する必要がある時代背景と考える必要があるのではなかろうか。

2の回答者は何らかの過去経験から幼児に抑圧をかけないことを良しとするあまり、自由放任になり、適正とは言えない。

3の回答者は幼児の発達に学び、個性に応じた援助を心掛け、環境を整え、寄り添う姿勢が見られる。

D. 演習課題②では辛かった6%、20%が少し楽しかったとしている。演習課題①では80%が楽しいと答えたに比べ、本講義では表現対象が実在表現になる抑圧と中学生レベルの「光と陰の学び」を再確認し、その理解度を図った点に原因があると考えられる。しかしながら、講義を経験とし、物の陰の表現が立体感や空間性を表すことを再確認できたと理解できる。2歳児頃の幼児が握れるものの大きさ表現、身近な鶏卵の観察経験が今後の生活に生かされる理解値につながると確信している。

E. 単体期の幼児が握れる玩具の直径の大きさは、現に6cm～4cmと9割が回答している
のである。

F. 自己評価での感想から

- ・ 思いどおりに描けなかった。・ とても難しかったが楽しかった
- ・ 光源を意識して描くことができた。・ 光と陰を表現できた。
- ・ 点ばかりで気持ち悪くなった。手がつかれた。難しかった・大変だった。
- ・ 結構立体的に描けて楽しかった。・ うまくできなかった。・ バランスが悪い
- ・ 卵や球体が描けることがわかり、素晴らしかった。段々楽しくなった。
- ・ 簡単そうで難しかった・修正がしやすかった・イメージが膨らんだ。

V. おわりに

点は放物線の交点で面積を持たない。交差点にも接点がない。くつつく箇所がないと考える。シナプス衝間のようにわずかな空間で放電刺激がある。ここに『点』が痕跡として生じているのだろうと推測して論をすすめたが、どうなのであろうか今後脳細胞の研究などで、なぜ我々は表象画を描き、探索したいと伝達を楽しむようになるのだろうか。絵画表現はわずかなシミですら、面積がなければ視覚認識が始まらない。老子に書かれている、見えないもの、とらえられないもの、聞こえないものが生き生きと渦まき働き、わからないエネルギーが芸術であると言われる。ガンジンスキーも「わからない要素の刺激」と表現している。蜂屋邦夫(2008)

4歳児頃の映像的表象期のフレーズ(語彙)カテゴリー(範疇)が少ないにもかかわらず、表現しようとするエネルギーが生み出す幼児の想像力、豊かな、神々しい表現が、脳科学の発達で創造への根源が解明されるのであろうか。ブルーナー著・岡本夏木他訳(1968)

いま、幼児に学び、科学の発達を待つ以上に実体験としての運動、活動と想像から創作へ、シナプス育成に繰り返し刺激し育む。バーチャルリアリティな世であるだけに、より多くの実体験を学生にも幼児にも与えたいものである。

幾度も繰り返し述べてきたが誰もができる描画表現は自由で平等、探索心を育み、想像から創作へ、個々人の個性による造形表現は新しい創造を生む原動力の始まりとなりうる。

このような観点から、塙は、そこに描こうとする運動(身体表現活動)と感受性(知覚認知能力)の微細な空間でおこる感性的放電を造形表現では『点』と認識し、作者が客観視した、自己表現に必要な最小面積を描画における『点』と定義し、「幼児の初めての絵『点』に学べ」と伝え論を閉じる。

引用文献

- ① 川満秀成編集 (1990) 『art magazine』「福岡の風土と芸術」—埤和道「原初主義」を「いのり」に託す— 株式会社日本美術出版 108 頁
株式会社美術出版社 21 頁～56 頁
- ② カンディンスキー著 西田秀穂訳『点・線・面』—抽象芸術の基礎— (1959/12/13)
- ③ 北井康郎編集 (2003) 『ART UNION JAPAN vol. 2 —99 人の個人美術—』—埤和道— 株式会社春潮社 162～17 頁
- ④ 近藤寿人編『芸術と脳』—絵画と文学、時間と空間の脳科学—小倉明彦
3 章時空間記憶と夢の仮設 (2013) 大阪大学出版会
- ⑤ J. S. ブルーナー著 岡本夏木他訳『認知能力の成長』上巻 (1976) 明治図書出版株式会社
- ⑥ 張鍾元著 上野浩道訳『老子の思想』—タオ・新しい思惟への道—講談社学術文庫 (1987/07/10) 株式会社講談社 102 頁
- ⑦ 蜂屋邦夫訳注『老子』 (2008) 岩波書店 61 頁
- ⑧ 福永光司著『老子』中国古典選 監修：吉川幸次郎 朝日選書 (19970125) 朝日新聞社 110 頁
- ⑨ 藤沢英明・小笠原登志子著『造形とイメージの心理』 (1979) 現代心理学ブックス 大日本図書株式会社
- ⑩ ペーター・アンセルム・リードル著 金田晋・森秀樹訳『ヴァシリー・カンディンスキー』パルコ美術新書 (1996/6/10) 株式会社PARCO出版 103 頁～136 頁
- ⑪ 真鍋一男著『造形の基本と実習』—5 点の力— (1982) 美術出版社 54 頁～69 頁
- ⑫ ローダ・ケログ著 深田尚彦訳『児童画に発達過程』—なぐりがきからピクチャーへ— (1998) 黎明書房 序文 ii 頁